

みあげた男

登場人物 僕

彼女

松本・宇宙人

夜、窓枠に腰かけて空を見上げている僕。

空は曇天。

僕 ♪見上げてごらん 夜の星を 小さな星の 小さな光が ささやかな幸せを唄ってる

階下の駐車場から彼女が、

彼女 え、なんでまだ居るの？

僕 やあ、おかえり。

彼女 え、バイトは？

僕 明日は天気良くなりそうだよ。

彼女 バイト。

僕 ほら、月が見えて来たよ。♪見上げてごらん

彼女、階段を上がってくる。

鉄の階段がカンカン鳴る音で踏みつける足の強さがわかる。

僕 ♪夜の星を 僕らのように 名もない星が ささやかな幸せを 祈ってる

彼女 (部屋に上がるなり) また休むの？

僕 ♪手をつなごう 僕と

彼女 ねえ、

僕 ♪追いかけてよう 夢を 二人なら 苦しくなんかないさ

彼女 …。

僕 ♪見上げてごらん

彼女 おいいつまで唄うんだて。

僕 おかえり。

彼女 今日に行くって言ったじゃん。何日休む気？ホントにもうクビになるよ。

僕 小学生の頃にね、UFOを見たことがあってね、それを松本君に言ったらさ、ウソつくたって言われて、まあ実際ウソなんだけどさ、どっという流れでそういう話になったのかももう定かじゃないんだけど、とにかく俺がUFOを見た事があるって言ってる、それを松本君はウソだって決めつけて、松本君は元々UFOなんて信じない子でさ、俺がどれだけUFO見たって言っても信じてくれないんだよ、

彼女 だって見たことないでしょ？

僕 うん。

彼女 早くバイト行きなさいよ。

僕 でね、だから俺もムキになってさ、こゝ最近ほぼ毎日見てるんだって、家のベランダから空に向けて念じれば必ず来てくれるんだって、そう言ったんだよ。

彼女 だからそれウソなんでしょ？

僕 うん。

彼女 早くバイト行きなさいよ。

僕 そしたら松本君、だったら今晚家に来るって言うんだよ。

彼女 当たり前じゃん、早くバイト行きなさいよ。

僕 でね、俺もいよいよ言っちゃったんだよ。

彼女 なんでそこは上手い事言って断らないのよ。

僕 分からないよそんなの、もう後には引けなくなっちゃったんだ。

彼女 どうすんのよ？

僕 だから姉ちゃんに相談してるんじゃないか…

僕と彼女の会話だったのが、いつのまにか小学生の頃の僕と姉の会話に変わっている。

彼女 なんでそんなどうでもいいウソつくかなあ…

僕 どうしよう、もうすぐ来ると思っ。

彼女 今日は外に「飯食べ」に行くからって言ってさ、

僕 もう食べちゃったもん。

彼女 …なんでそこはウソつけないの？

僕 あーどうしよう、明日からいじめられる。ウソつきの汚名を着せられる。

彼女 実際ウソついてるんだからしようがないじゃん。

僕 しようがないしようがないって、しよせん小学生の会話なんだからしようがないで片づけるのやめてくれないか。

彼女 …もう意味がわからない。

僕 ねえどうしよう、助けてよ姉ちゃん。

彼女 そんな事言われても…

松本が下から声を掛ける。

松本 たーけしくーん、あーそーぼー。

僕 わ、来た！どうしようどうしよう…

彼女 (顔を出し) あ、ごめんね、たけし今日、熱が出ちゃって、

松本 えー？

彼女 学校から帰ってきたら急に、インフルかもしれない。

松本 僕、UFO見に来たんですけど、たけし君がUFO見せてくれるって言うから、

彼女 ごめんなさいね、今日は無理かもしれない。

松本 たけし君出してくれませんか？多分それ、仮病だと思うから。

彼女 うーん、仮病じゃないと思うよ、四十度くらい出てるから。

松本 ホントはUFO呼べないからウソついてるんですよ。たーけしくーん。

僕 お前はなんでもかんでもそうやって俺の言う事全部ウソだと決めつけやがって、上がって来いよ、

見せてやるからなUFO！

松本 ほら、元氣そうじゃないか。

僕 元氣なものか、お前にウソつき呼ばわりされて頭に血が上って、それが四十度を超えたのさ。

松本 意味が分からないからお邪魔します。

松本、家の中へ。

彼女 また適当な事言って、上がって来ちゃうじゃない…

僕 ど、どうしよう、どうしよう姉ちゃん！

彼女 とりあえず寝てな、あなたは今熱があるんだから。

松本、部屋に上がる。

松本 来たぜ。

僕 おう、わざわざ悪いな。ゲホゲホ。

彼女 あんまり長居しない方がいいわよ、風邪うつっちゃう。

松本 UFO見たらすぐ帰りますよ。さあ、呼んでみせてくれよ。

彼女 あ、そっだ、ジュース持って来てあげるね。

彼女、出ていく。

松本 お構いなく。

僕 姉ちゃんかわいいだろ。

松本 微妙。

僕 なんだとこの野郎、中学三年で生徒会の副会計なんだぞ。

松本 役職も微妙だな。早くUFO呼んでくれよ。

僕 ちよつと待てよ、今からジュース飲むんだからな。果汁十八パーの八朔ジュース。

松本 さつきからお前の口から微妙な情報しか出て来てねえんだよ。さつきとUFO呼んでくれよな、

早く帰らないと母ちゃん怒るんだ。

僕 じゃあもう帰れよ。いいよ。

松本 早く呼べよ、このウソつき。

僕 ウソなんかついてねえだろ、俺は生まれてこの十一年ウソなんかついてねえ。

松本 だから微妙なんだよ。

僕 俺は今インフルなんだからな、うつすぞ。

松本 いいよ、それもウソだってわかっているから。

僕 …んのやろお…

松本 ウソつき。

僕 ベランダ出るよ！

松本 おう。

僕 いいか、空見てろよ。

松本 言われなくても見てるよ。

僕 いいか、見てろよ。

松本 おっ。

僕 …。

松本 どこだよUFO？

僕 まだ念じてねえんだよ。

松本 早くしろよ。

僕 うるせえなあ、集中しなきゃ通じないんだよUFO。

松本 …。

僕 お前が「ちやい」ちや言うって俺の集中が途切れるだろ。

松本 何にも言つてねえだろ、早く呼べよ。

僕 うるさいなあもっ！

外からヘンテコな音楽が流れる。

松本 ？

僕 ？

二人、空を見ると。

目の前を発光塗料でコーティングされたfrisビーが飛んでいった。

松本 …。

僕 …あれだよあ、あれが、UFOなんだよ。だつてお前は今まで見たことないからさ、あれが変な

frisビーみたいに見えたかもしれないけどさ、本物のUFOはああいうもんだからな。…うん。

松本 …帰る。

僕 なあホントだよ！UFOなんて実際見たらあんなもんなんだよ、なあ松本！

彼女 (ジューズを持って来て) あら、もうお帰り？

松本 …疑つてごめん。

松本、去る。

僕 …姉ちゃん、

彼女 …ふうー。

僕 …助かったあ。

彼女 …あんた、明日から一週間学校行けないじゃん、どうすんの？

僕 …あ、

彼女 もう知らん。

僕 で次の日母さんに仮病使つて学校休んでも、でも学校に診断書持つて行かないといけないんじゃないかって話になって姉ちゃんと、明日はどうしようかなって相談したら、

松本の声 たーけしくーん、あーそーぼ。

僕 昨日と同じ時間に松本の声がして、こっちはインフルで休んでるのにバカじゃないのかと思つて、

彼女 あー、たけしまだ熱が…

彼女、窓から顔を出すと、

彼女 わ…わわ、

僕 家の前にクラスの皆が集まつててUFO見たいつて、松本が言い触らしたらしくて、

彼女 えー、どうすんの？

僕 また昨日の作戦で行くしかないつてなつて皆を部屋に上げて、そしたら息子が風邪引いて休んだだけでクラスのみんながお見舞いに来るなつてて父さんも母さんも大喜びでさ、寿司とか出前で頼ん

だりしてさ、

松本 皆にもお前の才能教えてあげたいと思つてさ、だつてお前は宇宙人にも選ばれた人間なんだろう？地

球人代表みたいな小学生なんだぜ、そんな奴が同じクラスにいるなんてスゲーと思つてさ、

僕 それは嬉しいんだけど、あんまり見世物みたいにしたくないんだよ、だつて宇宙人だつて困っちゃ

うよ、特に用もないのにいちいち呼び出されてさ、その度に飛行航路変えなきゃいけないと思つし、

松本 でもお前は一人で毎日呼んでたんだろ？

僕 …うんまあね、でもそろそろ怒られちゃうと思つてたところなんだよ。

松本 ン、分かった。じゃあ今日だけにするからもう一回呼べよ。

僕 なんてそんな上からなんだよ、地球人代表だぞ俺は。

松本 早く呼べよ、洋子ちゃんがお前を見てるぞ。

僕 よし、呼ぶ！

松本 おいみんなー、あの辺だぞあの辺！

僕 UFO様 UFO様、どうぞ飛んでください。

松本 昨日はそんな事言わなかったのに、

へんテコな音楽が流れて、

彼女の声 ふんっ！

発光したフリスビーが飛んでいった。

皆…。

僕 …えー、あれが、UFOなのです。皆さんは、本物のUFOを見たことがないから、あれがフリス

ビーのように見えたかもしれないですが、

松本 落ちたー！公園の向こうー！探しに行こうぜ！

僕 みんな一斉に駆け下りて、それ見て父さんと母さんは

彼女 あら、もうお帰りっもうすぐお寿司が来るのよ、お寿司が、

僕 って言うんだけど皆はそれどころじゃないから、今はお寿司よりUFOだからさ、まあこれは余談

だけとおかけでウチには家族四人じゃ食べきれないほどのお寿司が後で届くんだけだね、それはまた今度話として、俺は必死に走ったさ、誰よりも早くね、だつて先にフリスビー見つければ良かったらおしまいだからさ、こんなに速く走れるならレーの選手に立候補すれば良かったつてちよつと頭をよぎつたけど公園に着いたらさ…、富士山のとつぺんのところに小柄の銀色の身体した宇宙人が立ってて、目が大きくて真つ黒で、表情がないから何考えてるかわからなくて、皆息を飲んでただ見てるしなくて、実際それはほんと一瞬だつたと思っただけどその時は結構な時間に感じて、

「キーン」

僕 耳鳴りみたいな音がして宇宙人がこっちに手の平を向けたんだ。そしたら皆

松本 宇宙人だー！！

僕 って逃げ出した。俺はそれが姉ちゃんだつてわかつてたからその場に残つて

彼女 姉ちゃん、助かったよ。

僕 って言ったんだ。そしたらこうやつて、

宇宙人、手招きをする。

僕 するから、だから僕は、

彼女 姉ちゃん、もういいから早く帰ろうよ、一緒に居るとこ見られるとまた厄介だからさ。…しかしよくそんな服持ってたね。恥ずかしくないの？

宇宙人 ワレワレハウチユウジンダ。

彼女 うん、たぶん本物の宇宙人はそんなこと言わないから(笑)。

宇宙人 手招きをする。

彼女 もう、なんだよ？

僕 って富士山に登ろうとしたら目の前に突然扉が現れて、それ公園の富士山だと思つただけどよく考えたらこの公園には富士山なんかなくてさ、だからそれ富士山の形したUFOだつただけどその時の俺はアホだからかよくわかんないけどそのまま中に入った訳、そしたら椅子が一個あつて、周りはUFOの中なのに外が丸見えで、壁が透けて、姉ちゃんも入つて来て

宇宙人 ユウキアルシヨウネンヨ、キミニコノヨノスベテヲミセテヤロウ。

僕 まあだいたいこの辺りでようやく「あ、これ姉ちゃんじゃねえな」って思い始めて、もしかしたらこれ本当に宇宙人かもしれないって思つたら、急にゾクって背筋がなつて…、足元見たらいつの間にか、…街が、すっごい小さくなつて、ホントに、何にも感じないうちにすっごい高いところに行つてて、

彼女 …あ、あのお？

僕 姉ちゃんは…その宇宙人は無表情のまま下を見てて、次の瞬間…日本が、まるまる、見えて、…それは本当に、ほんと一瞬の、…瞬きのうちに、今度は地球が見えて、

彼女 …あのお、どこまで行くんですか？

僕 動いてる感覚も何もないのにな、地球はもう星になつてて、近くには、多分太陽、大きな星があつて、…俺全身から汗が噴き出して、震えてて、それでもそのUFOはどんどん遠く、地球から、離れて行くのが分つて、

彼女 ねえ！ねえ、どこまで行くの？…！！

僕 無数の星が、あつて、地球がそのうちのどれかも分からなくて、ただの白い塊になつてて、白い渦が、あちこちにあつて、そのうち、なんにも見えなくなつて、真つ暗の、闇…。

彼女 お願い、帰して…。

宇宙人 ウチユウノソトガワニハナニガアルトオモウ？

彼女 そんなの僕には分からないです、おうちに帰りたいよ…。

宇宙人 ウチユウノソトガワニハ、マタベツノウチユウガアル。

彼女 …え？

宇宙人 ウチユウハ、ボウチヨウシテ、ボウチヨウシテ、トナリノウチユウヲアツパクシテ、アツパクサレテ、ヤガテハジケトブ。キミハ、ソノウチノヒトツノウチユウニソソザイシテル。

彼女 …泡だ。泡が見える。たくさん泡が渦を巻いてる。まるで洗濯機だ…、宇宙は、洗濯機の中にあつた！

僕 僕らは無数の泡の中にある、無数の素粒子の一つに過ぎない。それなのにたかが車のネジを作った
けの会社の中で働くのはあまりにもちつぽけだ。なんだってこの世のすべてを見て来たんだからね僕
は！

また現在の僕と彼女の会話を戻している。

彼女 もしその話が本当だとしたら、

僕 本当さ、僕はそれ以来一度と嘘はつかないと誓ったんだ。

彼女 あなたはその後どうやって戻ってきたの？

僕 宇宙人が公園まで送ってくれたんだよ。最後は手を振って別れた。

彼女 帰ってその話をお姉ちゃんに話した？

僕 もちろん、でも信じてくれなかったけどね。

彼女 宇宙の果てまでそんなに速く飛んで行ける乗り物に乗っていたら、戻って来たら数十年、あるいは数百年経つてもおかしくないんだけどね。

僕 あ、それ知ってる、ウラシマ効果たら、知ってる。

彼女 なのにお姉ちゃんも周りの景色も変わってなかったんでしょ？

僕 …うん。

彼女 だとするとあなたは元の世界には帰らず、隣の宇宙に飛んで来た可能性が高い。

僕 え…？！

彼女 無数に広がる宇宙には同じ数だけ世界があつて、それは少しずつ違う世界になつている。おそろしくこの世界に元から居たであろうあなたは、ちょうど宇宙人に連れて行かれた後だったのね。

僕 パラレルワールド…？！

彼女 ここはあなたの知っている世界とは違うけど、その僅かな変化にあなたは気づかないでいる。

僕 そうか！道理で僕はヒトとは違うと思つてたんだ！僕は別の宇宙から飛んで来たのかやっぱりな！

彼女 ひとつ言える事は、元の世界で私とあなたは出会っていたかもしれないし出会っていなかったか

もしれないって事。

僕 …え？

彼女 一人の人間の選択が、ほんの少し違うだけでその先の未来の世界は変わっていく。無数に存在する宇宙の中で、六十億の人間が居る、その人間一人一人の選択で未来は変わるとしたら、私とあなたがこうして一緒に住んでいる世界は、もしかしたらこの世界だけかもしれない。そして私は、あなた
の話を信じてる。

僕 …真琴。

彼女 あなたは、この世界に来るべくして来たのよ。

僕 …そうか、そういう事だね。

彼女 (空を見上げて) ほら、雲が晴れて来た。

僕 …(見上げる) うん。

彼女 バイト、行つて来なさい。

僕 …はい！(急いで玄関に向かい) 真琴、

彼女 なに？

僕 結婚しよう。

彼女 …まあとりあえずバイト行つて来なさい。

僕 行つて来ます！

僕、出ていく。階段を降りる音。

彼女 …。

僕 (下から) 行つて来ます。

彼女 行つてらっしゃい。

彼女、窓枠に腰かけ空を見上げる。

彼女 ふう…、めんどくせ。

夜空にはたくさん星が光っている。

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」へどうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp